The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	随心院蔵『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』紙背『中臣祐殖百首』残簡について
Author(s)	海野, 圭介
Citation	語文. 2004, 80-81, p. 64-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

随心院蔵『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』紙背『中臣祐殖百首』残簡について

海野圭介

一

『楢葉集』（素俊撰・嘉禎三年1237成立）、『自葉集』（中臣祐臣・正応～嘉禄頃成立）[1]や春日懐紙[2]が伝えるごとく、中世前期の南都における和歌文芸活動の場の一つに春日社があった。春日若宮神主中臣氏（辰市氏支流千鳥氏）とその支流は、春日社歌壇の中心的役割を担ってきたと考えられており[3]、祐茂（正治元年1199―文永六年1269・七十一歳）以来、五代に亘り勅撰歌人を輩出している。

南都に留まらない中臣氏の広範な活動は、為家批点と考えられる中臣祐茂百首[4]、為氏批点とされる中臣祐春詠草[5]などの遺品により、その実際が人的交流の側面からも窺われるが、標記の資料もまた、そうした春日社家の和歌活動とその拡がりを伝える資料である。『中臣祐殖百首』（以下誤解の恐れのない限り「本書」と称す）と称した当該資料は、真言宗善通寺派大本山随心院（京都市山科区小野御霊町）に伝領される『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』と題された真言聖教二巻の紙背として伝わる和歌残簡で、記される位署や和歌により春日社正預中臣祐殖による定数歌であることが知られる[6]。従来知られない春日社家の和歌であり、中に勅撰集入集歌を含み、南都歌壇と勅撰集との関係を考える資料となることが期待される。

二

はじめに、現装の表面に記される『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』の書誌的事項を示しておきたい。

『秘奥集』（第2函34号［5］）　〔南北朝期〕写　一軸

続紙（軸無し）。巻出は本文共紙、左肩打付書「秘奥集maki（梵字）」。料紙、楮紙。紙数13枚。法量、第1紙15.5×45.6㎝、第2紙（以下紙幅のみ記す）49.5㎝、第3紙49.0㎝、第4紙48.9㎝、第5紙49.5㎝、第6紙49.3㎝、第7紙49.4㎝、第8紙49.5㎝、第9紙48.7㎝、第10紙27.0㎝、第11紙49.3㎝、第12紙49.0㎝、第13紙45.3㎝。行数・第2紙一面21行。内題「秘奥集」。外題右方下に「雅西」の墨書。識語は次掲の通り（改行

を「／」で示した）。

治承三年（1179）三月之比籠／居或山里徒然之餘集／随聞随見秘曲名秘奥／抄之更不可他散而已／山隠比丘雅西

印記なし。用字、漢字（表面）、漢字・平仮名（紙背）。

『阿弥陀決定往生秘印』（第2函第35号［10］）　〔南北朝期〕写　一軸

続紙（軸無し）。巻出は素紙（15.7×17.9㎝）、左肩打付書「阿弥陀決定往生秘印」。料紙、楮紙。紙数3枚。法量、第1紙、15.7×3.4㎝、第2紙（以下紙幅のみ記す）4.9㎝、第3紙49.3㎝。行数・第三紙一面22行。識語は次掲の通り（改行を「／」で示した）。

治承四年（1180）十一月於西／光院奉傳受畢／如此口決等上古以来雖／不注紙上為令備廃亡／注記之　雅西

印記なし。用字、漢字（表面）、漢字・平仮名（紙背）。

両書の識語に見える「雅西」は、『秘奥集』に付載の血脈により、その相承が知られる（（　）内は稿者）。

右大事相承次第云

高祖（空海）　真雅　源仁　聖（聖寶）―　観賢　淳祐　元杲　仁海　成尊　義範　勝覺　聖賢　源運　雅西　（『秘奥集』付載血脈）

この血脈は、同様の例が『伝法灌頂師資相承血脈』[7]に見え、智定坊雅西（保安四年1123―正治三年1201）が比定される。

（略）―大僧都源運（付法卅八人）―雅西（智定坊　承暦元―十一―廿―洛東　三十八　六口　正治三―正―四―入―七十九）

『秘奥集』の巻出には伝領墨署名が記され、雅西手沢のようにも見えるが、紙質・書風等からも両書共に平安期に遡る書写とは認められず、また、紙背和歌の詠者である中臣祐植の生存期間も鎌倉後期頃であることから、両書は鎌倉後期以降の書写と判断される。[8]

三

次いで紙背であるが、元来の和歌の書写面を翻し天地中央で二つに裁断して、それぞれに『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』を書写するため、紙背に書写された和歌は、初句・第二句・第四句を記す上半部分（『阿弥陀決定往生秘印』紙背）と第三句・第五句を記す下半部分（『秘奥集』紙背）とに二分されており、うち上半部は一部を残すのみで多くを佚している。両聖教の紙背を繋ぎ併せ、改めて復原的に書誌的事項につき示せば左記のようになる。

『（中臣祐殖百首）』残簡（第2函34号［5］・第2函第35号［10］）　〔南北朝期〕写　一軸

続紙（軸無し）。巻出なし。料紙、楮紙。紙数13枚（但し天地二分）。法量、第1紙31.2×45.3㎝、第2紙49.0㎝（以下紙幅のみ記す）、第3紙49.3㎝、第4紙27.0㎝、第5紙48.7㎝、第6紙49.5㎝、第7紙49.4㎝、第8紙49.3㎝、第9紙49.5㎝、第10紙48.9㎝、第11紙49.0㎝、第12紙49.5㎝、第13紙45.6㎝。端に「春日執行正預正五位下中臣連祐殖」の位署あり。行数・第2紙一面20行。和歌一首2行書。奥書・識語類なし。印記なし。用字、漢字・平仮名。

記載される和歌の殆どは、第三句・第五句が知られるのみであるが、幸いにも巻首が残存しており、**図1**のように、端に「春日執行正預正五位下中臣連祐殖」と記され、その上部には、「哥」字と思われる字画の一部が残っており、「詠百首和哥」等の端作が記されていたと推測される。巻尾には、最末尾の和歌（現行の九十六番歌）を記した後に約二十五㎝の白紙部分（『秘奥集』の巻出に相当）

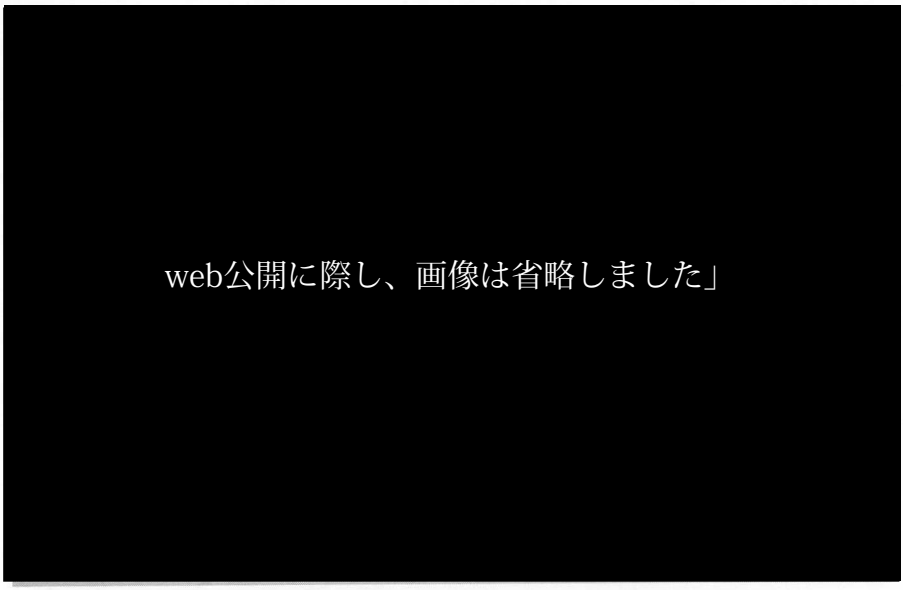

図1　『中臣祐殖百首』巻首（『秘奥集』紙背）

があり、現行の巻尾が元来のそれであったと思われ、首尾備わるようである。

残存部分を上・下組み合わせ翻刻すれば稿末に付したようになる。記載される和歌は、現行の紙継順に次のように配列され、計九十六首となる（推定される歌題を〔　〕で示した）。

・春十九首（01～19番歌、歌題…春・〔若菜〕・〔残雪〕・〔柳〕・春月・帰鴈・花・〔藤〕・〔三月尽〕）
・夏八首（20～27番歌、歌題…〔郭公〕・〔五月雨〕）
・秋十九首（28～46番歌、歌題…〔七夕〕・〔月〕・〔鹿〕・〔霧〕・〔菊〕・〔紅葉〕）
・冬十首（47～56番歌、歌題…〔初冬〕〔霜〕・〔氷〕・〔雪〕[9]）
・恋二十首（57～76番歌、歌題…〔初恋〕～〔恨〕）
・雑二十首（77～96番歌、歌題未詳）

和歌の配列からは現行の紙継に錯簡は認められないようだが、第四紙末尾の二十七番歌の下句を欠くなど、一部に脱落が想定される。殆どの料紙が紙幅四十九㎝前後であるのに対し、第四紙は二十七㎝と短く、二十㎝程度を裁断、歌数にして二首～四首を佚すると推測される。第四紙と第五紙の間は、夏部と秋部の境にあたるが、現存の秋部冒頭は立秋詠（二十八・二十九番歌共に初風を詠む）が二首続くため秋歌のみ複数首の脱落は想定し難く、恐らくは夏歌数首と秋歌一首を佚すると思われる。同様に、第一紙の紙幅も四十五・三㎝と他に比べ四㎝程短く、巻首の白紙部分、または春歌一～二首を裁断している可能性がある。

右記のように見ると、本書の本来の形態は現行を大きく逸脱するものではなく、天地三十一㎝前後、紙幅四十九㎝前後の料紙を十三

枚継ぎ、百首前後を記す定数歌であったと推測される。大ぶりの料紙に和歌一首を二行書で記すことから、自筆原本、或いはそれに近い写本であろうと考えられるが、現時点では比較検討可能な祐殖自筆の資料を見出せていない。[10]

なお、現存部分からは、「春」「春月」「帰雁」「花」の四つの題が確認されるが、全編が組題による詠作ではなく、八十番歌のように詠作事情を散文で記す箇所も散見する。こうした形態は、百首歌の通例とは異なるが、同様の例に、国立歴史民俗博物館蔵『中臣祐茂百首』（祐茂自筆）[11]があり、「小家集的な形態」（『新編国歌大観解題』）と評されるように散文による詠作事情を記した詞書を付す和歌を交える。また、『祐茂百首』も、「詠百首和歌」と端に記しながら、百六首を収めている。本書も同様な例であったと考えられる。

四

本書の詠作者である中臣祐殖は、春日懐紙とその紙背の春日本万葉集の書写で著名な春日若宮神主中臣祐茂の孫、春日社正預祐親（仁治元年1240―元亨二年1322）の三男にあたる。建治元年（1275）生まれ。正和五年（1316）に春日社権預となり、暦応三年（1340）七月五日に春日社正預に転じ、康永元年（1342）には春日社若宮神主を兼任する。[12]掃部頭。観応三年（1352）三月二十四日に七十八歳で没している。

歌歴としては、『続千載集』『風雅集』『新千載集』『新拾遺集』『新続古今集』への各一首の入集が知られる勅撰歌人であり、小倉実教撰『藤葉集』にも三首が入集する。

本書の成立時期は、記される位署から祐殖が春日社正預であった暦応三年（1340）七月五日以降、祐常に譲る貞和五年（1349）十一月二十二日迄の約九年間に絞られるが、康永三年（1344）以降、康永四年（1345）八月二十五日以前成立と推定される[13]小倉実教撰『藤葉集』に本書所収和歌のうち左記の二首が入集することから、同集の成立推定時期の下限に本書成立の下限を重ねることができよう。[14]

・二十六番歌（随心院本には傍線部分のみ残存、以下同様）

夏歌の中に　　中臣祐殖

さらしえぬ色かとぞみる五月雨ににごりて落つる布引の滝

（『新続古今集』巻三・夏・291、『藤葉集』巻二・夏・136「滝五月雨を」）

・五十番歌

（題しらず）　　中臣祐殖

打ちわたす駒のひづめにくだくるはひのくま川のこほりなりけり

（『藤葉集』巻四・冬・348）

『藤葉集』の側から見れば、本書はその撰集資料の一つであったと考えられ、同集の編纂について考える資料ともなるが、他に『風雅集』以下の勅撰集入集歌を四首含んでおり（先記の二十六番歌は、『新続古今集』に入集）、それらとも密接な関係にあると考えられる。

・八十七番歌

祖父祐茂自筆の祝本をみてよみける　　中臣祐植

かはらじなあとはむかしになりぬとも神の手向の代代のことのは

（『風雅集』巻十九・神祇・2138）

・八十番歌

父中臣祐親に笙笛にて秘曲どもつたへ侍りて、又狛則忠に笛の大曲伝へ侍りける時思ひつづけ侍りける　　中臣祐殖

笛竹の二の道をつたへても跡にかはらぬ一ふしぞなき

（『新千載集』巻十七・雑中・1906）

・七十七番歌

（神祇を）　中臣祐殖

春日野の松もわが身も老いにけり二葉よりこそつかへそめしか

（『新拾遺集』巻十六・神祇・1416）

本書と勅撰集との先後については、勿論、既存の勅撰集入集歌を集成し改めて定数歌を編むことも想定され得る（例えば、奉納和歌とするため等の目的が想定される）が、『新千載集』『新拾遺集』『新続古今集』の三集の成立は祐殖没後であり、もとより祐殖自身がそうした操作を行うことは不可能である。

また、勅撰集に入集する祐植の歌には、先記四首以外に『続千載集』所収の左記の一首があるが、同歌は本書には含まれていない（同歌は、秋歌、或いは雑歌として配列されると推定され、本書の物理的脱落箇所に記されていたとも考え難い）。

（題しらず）　中臣祐殖

さやかなる名をばとどめてきよみ方かたぶく月に関守ぞなき

（『続千載集』巻十六・雑上・1768）

本書の成立は、『続千載集』（元応二年（1320）返納）成立後であり、同歌が本書に所収されないのは当然と言え、逆に勅撰集入集歌を集成し後代に本書が編まれた（この場合は、聊か不自然ではあるが本書を祐殖の自撰ではなく他撰と考える）と考えるのならば同歌が含まれないのは不審である。『風雅集』以下の四勅撰集が本書を撰集資料としたと考えるのが妥当であろう。

五

本書は南都のみに留まることはなく、成立に近接する時期に京都へと伝えられ、勅撰集・『藤葉集』の撰集資料とされたと考えられる。祖父祐茂、従兄祐春と同様に京都歌道家の指導を仰いだ可能性も想定されるが[15]、現存する資料の制約もありその間の具体的経緯は現在のところ未詳とせざるを得ない。『新後撰集』『玉葉集』『続千載集』の三集には、春日社家の詠作が多く入集する[16]。十四世紀初頭が南都歌壇の隆盛期であり、京都との交渉も盛んであったと考えられるが、本書もそうした時代の輪郭を伝える資料と言えよう。

注

（1）中世南都における文芸活動全般を扱った先駆的業績に永島福太郎氏『奈良文化の伝流』（目黒書店　昭26・2）があり、『楢葉集』と南都歌壇については、中村文氏「鎌倉初期南都歌壇に関する二、三の考察」（中世文学34　平元・5）、同氏「定範と東南院歌会―鎌倉初期南都歌壇の一考察―」（立教大学日本文学63　平元・12）、加賀元子氏『中世寺院における文芸生成の研究』（汲古書院　平15・1）により、『自葉集』については、久保木秀夫氏「『自葉集』と伝二条為道筆西宮切」（国文学研究資料館紀要28　平14・2）により検討が進められている。

（2）春日懐紙に関する近年の論考に、伊井春樹氏「春日懐紙とその周辺」（語文74　平12・5）、田中大士氏「春日懐紙墨映論序説」（『平安朝文学表現の位相』新典社　平14・11）、同氏「春日懐紙（春日本万葉集）の来歴」（汲古39　平13・5）があり、懐紙の集成が進められている。

（3）注1に記した永島氏論考参照。

（4）国立歴史民俗博物館蔵。『日本名跡叢刊58春日若宮神主祐茂百首和歌』（二玄社昭57・2）に影印（解説・古谷稔氏）、井上宗雄・田村柳壹氏『中世百首歌　二』（古典文庫　昭58・9）・新編国歌大観第10巻

に翻刻がある。

(5) 現蔵者未詳。「中臣祐春詠草」(春名好春編『古筆大辞典』淡交社昭54・11)八五六頁に書影が挙げられ解説が付される。

(6) 本書の現存は百首に満たないが、後述の理由により百首歌と称すのが妥当であると判断し、標記のように仮称した。

(7) 築島裕氏「醍醐寺蔵伝法灌頂師資相承血脈」(醍醐寺文化財研究所紀要1 昭53・11)。

(8) 本書(及び紙背)の伝来は未詳ながら、紙背に南都に関係する和歌が記されることから随心院での調整は想定し難いようにも思われる。歴代の随心院門跡は、東大寺別当を兼帯する例もあり、現在随心院文書として整理されている文書群の中には東大寺旧蔵文書も含まれている。そうした南都の文書群と同様の経路も考慮に入れるべきであろう。

(9) 冬歌の冒頭については、「いまはただ老のね覚にかこつかなむかしもとききしおなじ時雨を」(新後撰集・巻六・冬・447・民部卿資宣)に類似する発想と判断し四十七番歌としたが、同歌が秋部に含まれる可能性もあろう。

(10) 自筆の書状案、短冊写等(何れも個人蔵)は調査できたがいずれも比較検討の対象には不適切であったため判断は更なる検討に委ねたい。

(11) 同百首は、冒頭から「霞」(二首)、「霞隔遠松」(一首)、「鶯」(一首)、「故郷梅」(一首)、「若菜」(一首)、「野若菜」(一首)、「山家待花」(一首)と素題・結題による詠作が続いた後に次のようにある。

わづらふ事侍りけるころ、待花を云ふ事を人人読み侍りし

9はなよりも身はいつまでのあだもののさくをおそしとまつがはかなさ

初花

10よしのやまかぜになびかぬむらくもやかつさくみねのさくらなるらん

春日社長日御経に安置したてまつりし法花経のうらに、念仏の歌をすすめ侍りしに

11ながき日もあかなくくれぬやまざくらはなのかげにやこよひなまし

(12) 大東延篤氏『新修春日社社司補任記』(春日宮本会 昭47・11)による。

(13) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 南北朝期〔改訂新版〕』(明治書院平2・9)四三六頁。

(14) 但し、その場合は、『藤葉集』成立以後に祐殖歌の増補がなされなかったと考えることが前提となる。

(15) 注4・5に掲出の資料。

(16) 春日社家中臣氏の勅撰集入集状況は左記の通り。

祐茂—続後撰1、続拾遺1、新後撰1、玉葉1、続千載1

祐賢—続拾遺1、新後撰1、玉葉1、続千載1

祐親—新後撰1、玉葉1、続千載3、新千載2

祐春—新後撰3、玉葉2、続千載5、続後拾遺2、風雅2、新千載1

祐世—新後撰1、玉葉1、続千載3、新千載1

祐臣—玉葉1、続千載3、続後拾遺1、風雅1、新千載1、新続古今2

祐殖—続千載1、風雅1、新千載1、新拾遺1、新続古今1

祐任—風雅1、

付記 貴重な資料の調査閲覧と紹介をお許し頂きました随心院当局、執事亀谷英央師、亀谷壽一師、また、随心院の皆様に記して御礼申し上げます。

—本学大学院助手—

翻刻凡例

一、随心院蔵『秘奥集』(第2函34号[5])、『阿弥陀決定往生秘印』(第2函第35号[10])紙背、『中臣祐殖百首』を全文翻刻した。原本に忠実を心掛けたが、以下の処置を加えた。

一、『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』の両紙背を繋ぎ併せ復原的に翻刻した。

二、破損等による難読箇所は、残画から文字が推定される場合は、〔哥〕のように〔 〕を付して示した。

三、勅撰集・藤葉集入集歌には傍線を付した。

四、推定される部立、歌題と歌数を付記した。

阿弥陀決定往生秘印紙背

01 春　」（第3紙）

〔哥〕
春日執行正預正五位下中
臣連祐殖

秘奥集紙背

【春・19首】

歌題

にてらす日かけをは
〔ひ〕かりとそ見る
02 ひの松のゆくすゑは
代をこそふれ

春

03 ろをたのみてあわ雪の
かなをそつむ
04 は猶もうつみいて
雪もかくれぬ

〔若菜〕

05 てとはん人もかな
をしまし
」（第1紙）

〔残雪〕

06 春雨に露こそ
いとゝみとりや色
春月
07 おほろなるな
むすへ青柳の
まさるらん

〔柳〕

らひを月にうらむれは
かすみそえたる
08 春ことにかすみ
かさなるかけを
09 おほろなる身に
老のたもとにかす
帰鴈
10 しのゝめのあけ
よこ雲なからた
花
11 なからへてことし
はなにうれしき
12 かすか山しめの
心なかくも花に
13 桜さくかつらき
雪かとはかりみて
14 花ゆへにとはる
よそなからたに」
（第1紙）
15 かねてよりち
花みぬさきの」（第2紙）
16
17

春月

我涙かな
そえては老らくの
月に見るかな
こそいとゝあわれなれ
む月かけ
行空にかへる雁
ちわかれけり
も見つとおもふより
命なりけり
あたりにとしをへて
なれぬる
山もよそなれは
やゝみなむ
ゝやともちかゝらは
人め見てまし」（第2紙）
るならひそと思しは
心なりけり
むとのみおもふこそ
〔ち〕なりけれ
き涙をさきたてゝ
ちる桜かな

帰鴈

花

〔藤〕

18 きそふ北の藤なみは
19 みなりけり
〔三月尽〕
20 ぬ名残もわすれぬに
19 くるゝ春かな
【夏・8首】
20 の杜のほとゝきす
〔郭公〕
21 にもらすな
20 かたせてほとゝきす
21 つねをそとふ
〔郭公〕
22 〔し〕なからにきなけとも
22 しかのふるさと」（第3紙）
23 〔に〕
23 なきしかの故郷に
24 ひなかるらん
24 みえね夏はきて
25 かくさのさと
〔五月雨？〕
25 たこのぬれころも
26 もほすらむ
〔五月雨〕
26 とそ見る五月雨に
〔ぬ〕のひきの瀧

27 のはしのいたつらに」
（第4紙）
28 ならて我袖の
28 のはつかせ
29 まてはなけれとも
29 おきの上風
【秋・20首】
〔立秋〕
30 ゆふへや七夕の
30 〔し〕かるらむ
〔七夕〕
31 を待し心より
31 〔し〕あひの空
32 のみしかき夜とゝもに
32 風そふく
〔月〕
33 の山にすむ月の
33 けの玉かき
34 けの月のかけすみて
34 をそふく
35 をなくさめて
35 もしられす　」（第5紙）
35 をなくさめて

36 もしられす　」（第5紙）
さひて人しれす
さめなりけり

37 〔月〕
に
心をなくさめて
もありけむ

38 ひ原の山を吹風に
秋の夜の月

39 〔鹿〕
はきかす春日野の
さほしかの声

40 とおもふへき春日のに
しかのなくらむ

41 〔霧〕
の秋霧はれぬれと
煙なりけれ

42 〔ま〕の山のちかけれは
しのゝさと

43 むしとやしつのめか
つらむ

44 〔し〕に　」（第6紙）
ねぬ袖にをとふけて

〔山〕田もるらん

〔菊〕

45 かくるやとたをりても
らきくの花

46 〔紅葉〕
をみつゝもかなしきは
のもみち葉

【冬・9首】

47 〔初冬〕
のをとをかこつらむ
わぬものかは

48 こそせめてとはさらめ
る木の葉かな

49 〔霜〕
みの川になくかもは
をくらん

50 〔氷〕
むまのひつめにくたくるは
〔氷〕なりけり
」（第7紙）

51 〔雪〕
気さひしき山里は
人そまたるゝ

52 〔り〕うつむやとなれは
〔ゆ〕のしらゆき

53 みのみこそつもりぬれ
はきゆれと

54 た見えそめぬしのゝめに
のあさあけ
55 さとのしるしにて
原の山
56 を
ふかく見ゆるかな
みの衣手
57 花そめの恋ころも
を見せはや
58 ひなとこそつれなさを
なりけれ
59 われからと思ふにそ
をいのりける
」（第8紙）
60 心とうらみきく
我そわするゝ
61 て人を待よひは
入あひのかね
62 ことにかへしきて
〔夢〕そかさなる
63 に
もよそにをしけれは

【恋・20首】
〔初恋〕
〔待恋〕

64 人にかたらし
たいとのなからへて
65 契なるらん
66 もせめてかたからめ
られさるらむ
67 もしらて思ねの
をのみそなく
68 のとかになしはてゝ
もかよはす
69 のをかのくすかつら
人にしられし
みの浦のあまを舩」
（第9紙）
70 さり行
ちかへるしらなみの
71 〔く〕千鳥かな
と思ふあらましの
72 のこゑ〳〵
の煙のすゑにても
73 ひくへき
のみのいのちたに

74 契なりけり
かりけるいのちとも
ひこそしれ

75 もたえてたまかつら
のこるらむ

〔恨〕

76 かことゝなりにけり
〔うら〕みさりしを

77 〔我〕身も老にけり
かへそめしか
の心にしたかへは
もまとす　」（第10紙）

78 とゝまらぬ心そと
我涙かな

79 蓮ニ笙笛にて大曲共
則忠に横笛の秘曲無
時思つゝけ侍ける

80 つのみちをつたへても
ふしもなき

81 ある国に跡たれて
まもるらむ

【雑・20首】

82 花をうらみつゝ
〔我〕こゝろかな

83 は神もみかさ山
をたのむかな

84 る君かみゆきをも
やまつらむ

85 に御床を同せんといふ
契をむすひきて
のはまおき

86 し春日野の
勢のはまおき」（第11紙）

87 〔茂〕自筆の祝本を見
むかしになりぬとも
々のことの葉

88 仕の専一の着倒
毎年被尋下則

89 〔預〕事を
ねのみつかきに
ふりにける

心を
てすむ月かけも
〔り〕なりけり

90 〔み〕かさの山もりは
91 ちもまよはし
92 ことを
93 るしての宮々を
94 そめけむ
95 つのたのみにて
96 〔代〕をいのるかな
を
代にきゝしことの葉を
たち宮人　」（第12紙）
かせしみつのをの
国そさかふる
し神代のひかりをは
まも見るかな
みをそしてさかき葉の
色そさかふる
（以下白紙）　」（第13紙）